パリふたたび

平岡篤頼

小沢書店

パリふたたび

平岡篤頼

小沢書店

平岡篤頼（ひらおか　とくよし）
1929年大阪に生まれる。1952年早稲田大学文学部卒業。
現在，早稲田大学文学部教授—フランス文学。著書に評論集『変容と試行』『迷路の小説論』（河出書房新社）等があるほか，スタンダール，バルザックからクロード・シモン『フランドルへの道』をはじめとするヌヴォー・ロマンの多くの翻訳がある。

パリふたたび　　定価1400円

昭和56年7月20日　新装第一刷発行

著　者　平岡篤頼
発行者　長谷川郁夫
発行所　株式会社小沢書店
東京都千代田区富士見 2-5-12　Tel. (03)263-9218
印刷　凸版印刷　製本大口製本

©T. Hiraoka, 1981　　Printed in Japan

パリ通信　7
再びまみえるパリ1　7
再びまみえるパリ2　18
錯覚としての自由　30
モンマルトルの夜　50
忘れ得ぬ顔　71
キャッフェの人間学　92
オランダ・ドイツの旅　113
また会う日まで　135
踊るアメリカ　155
ヴァンセンヌのこと　183
空白の八十五日——あとがきに代えて　205
対談　われらがフランス体験　辻邦生・平岡篤頼

装幀　中島かほる

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

パリふたたび

パリ通信

再びまみえるパリ　1

再びまみえるパリ……。十年ぶりに踏んだパリの石畳……。

何かそういった紋切型でこの文章を書きはじめるつもりであったが、日本を出てから、ホンコン、マカオ、ローマ、ナポリ、ポンペイ、ソレント、フィレンツェ、ヴェネツィアと歩き廻り、パリに着いたかと思うと、すぐに汽車に乗って、リモージュ、ボルドー、マドリッドへと旅し、更にパリに戻ってからロンドンへ飛び立ったので、今では、「ようやくパリに戻った」という実感しか持つことができない。すでにロンドンの空港で、帰国する家内を見送った時、ひとりで出入国管理事務所へ入って行く彼女の後姿が哀れでならなかったのも、何か遠い異国へ、外国語をひとつも知らない彼女を送り出したというような、奇妙な錯覚を覚えたからしいのである。

といって、パリを故郷と感じ、フランスを祖国として愛しているという意味ではない。自分を異邦人と感じ、フランスの役所や会社や商店、要するにフランス社会の仕組みに不

満を持っていることは言うまでもない。そしてそれは、あくまで日本とくらべた時の不満であり、批判である。

にも拘わらず、このおんぼろアパルトマンでこうして、おもちゃのように小さな電気スタンドの明りを頼りに、机に向かっていると、異国にいるような気がしないのである。上の階や同じ階の他のアパルトマンから聞こえて来る足音や皿を洗う音やテレビの女アナウンサーの声も、今となってはぼくの日常生活そのものの音と化してしまっている。前回は、大学都市のフランス人学生寮で一年半、十六区の豪華なビルディングの女中部屋で一年間過したから、アパルトマンに住むことは初めてであるが、日本の自宅からこのアパルトマンに来たという気がしない。十六区から直接ここへ越して来たような感じがするのである。

これは不思議な感覚である。必ずしも珍しい感覚ではないに違いない。例えば、ぼくは幼い頃を大阪と奈良で過ごした。だから大阪とか奈良へ行くと、関西弁にも少しも違和感を感じず、その日からでもその土地の人間にまじって暮して行けそうな気がする。同じことは、若い頃一年間過した伊豆の下田港についても言えるかも知れない。

それにも拘わらず、その感覚の不思議さを消化することはむずかしい。もしもこの感覚がにせものでないとしたら、帰国してから十年間の日本での生活はどうなってしまったのか。十六区からここへ引越して来たのがほんとうだとしたら、日本でのその十年間は架空の生活、夢の中の生活ではないのか。それは、羽田を発った時から未来を失ったために、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

それ以上連続的に展開することができず、封印されて、そっくりそのままどこかにしまいこまれてしまったかのようである。大学紛争の渦中にまきこまれ、担当者の一人として毎日朝から晩まで事務所の奥に詰めていた頃のこと。翻訳の仕事をせきたてられて、ホテルに罐詰になってせっせと枡目を埋めていた頃のこと。信州の田舎の家で、息子たちと野球やバドミントンに興じていた頃のことも……。

そう言えば、日本にいた間は、前回フランスで過した生活の思い出が、やはりそのまま封印されて、どこかにしまいこまれていた。だから滅多に思い出すこともなかった。そして皇太子の御成婚式の模様も、叔父夫婦の死も、長男が小児喘息で苦しんだ様子も知らないにも拘わらず、一度も日本を離れたことがなかったかのように生活していた。そうして、一部の留学生のように、「フランス紀行」や「フランス文学地誌」を売り物にして、原稿料を稼いだりしなかっただけに、思い出がいっそう純粋に保存されていたのかも知れない。

もともと名所見物が嫌いで、当時の友人たちのように、毎日の見聞を日記に書きつけたりもしなかったから、原稿の書きようもなかったろうが、そればかりでなく、二度とフランスへ行けないと諦めていたことも、確かである。だから、故意に思い出すまいとしたのに違いない。十年ぶりで、相変らず薄汚ないパリの地下鉄に乗るまで、その二カ年半は存在しないにも等しかったのである。

今回は違う。二度目に来たということは、三度目も可能性があるということである。二度目に同じ町を訪れることによって、虚構と化してしまっていた思い出が現実性をとり戻

したことは既に言ったが、明年の夏帰国しても、今回の滞在の思い出は、完全な虚構となりきることができないに違いない。もちろん、家庭と勤め先と職業とのかもし出す、ひときわ濃密な現実感の網目の中で、やはり徐々に虚構と化していっても、それは現実と切りはなされたものではなく、いつ何時現実にとって変るかも知れない虚構にしかなり得ないのだ。日本でのぼくの生活という、ただひとつの現実があって、その中でパリでの生活という、非現実的な夢を見るのではない。ぼくの中に、二つの異質な現実が並存していて、お互いに相手を虚構と化しながら、交互に現実性を強化し、また現実性を失って行くのに違いない。

すでに無数の人間が経験し、何も特別珍しいことではないにも拘わらず、そのことにぼくはこだわらずにいられないのである。なぜならば、多くの人間はそれを当然の事と観じ、知的に処理してすませてしまうだけだが、この現象の本質をなしているものは感覚だからであり、それもまさに、われわれが現実性を判断する根拠となる感覚だからだ。いわゆる現実と虚構と、あるいは体験と夢と、どちらがはたして現実性をより多く持っているかを疑わせるような、そんな感覚を「錯覚」とのみ割り切ることができるだろうか。実際に、今のぼくにとっては、この十年間の日本での生活は、実在しなかったのだと思えば、容易に思い込めるのである。

夢について言えば、また、こういうことも書きとめておきたい。それは、フランスから帰国してしばらくたってからのことであるが、フランス政府の給費留学生試験をもう一度

受けて、また合格した夢を見たことがあるのである。もちろんその試験は、二度合格することはありえない。というよりは、一度給費を受けて留学したものは、再受験を許されない。ほかに技術留学生試験というのがあって、医者とか心理学者とかなら、なんとか名目を考え出して、そちらのほうを再受験することができる。しかし文学関係の者には、それも不可能である。

ところがぼくは、夢の中で、同じ試験を二度受けて、再度合格したのである。「こいつは済まない！」と、その時、半分は嬉しさから、半分はてれかくしに、冗談めいた口調で思わず叫んだ。その自分の声に目が覚めたのだった。そして目が覚めてからも、しばらくはそれが夢だったことに気がつかなかったのである。そればかりでなく、今度の渡仏を準備する間にも、時々、ふっと三度目に渡仏するような気持になっている自分に気がつくのだった。今、こうして書いているぼくの心の隅のどこかにも、その夢の残り滓が残っていることを認めないわけにゆかない。

それからまた、ぼくの教えている大学にパリの学生食堂とおなじような学生食堂があるという夢を見たこともあった。その場所が、事もあろうに、入学式その他の行事が行なわれる、ぼくの大学の象徴的な建物となっている大講堂なのである。十枚綴りになった食券を持ってその階段を上って行くと、ロビーに食券をもぎるおばさんがいて、それから柵で囲われた通路を通り、セルフサービスの料理の並んでいるところへ進んで行く。たしか、その夢の中では、夕食の最終時間すれすれに、息を切らせて飛びこんだかのように記憶す

る。先日、ソルボンヌへ登録に行っていて、学生食堂カードを貰うために行列している学生たちを見ているうちに、ふと、その夢が現実の経験であるかのような錯覚に襲われたのだった。

だから、今、東京の大講堂には実際に学生食堂があるのだと、誰かに言われれば、ぼくは容易にその言葉を信じるだろう。そればかりでなく、今、こうして書いているぼく自身が、東京の自宅にいて、そんな夢のことを、そしてまた夢の中で見たパリのこのおんぼろアパルトマンのことを書いているような錯覚すら、ぼくの意識の境のあたりに現われたり消えたりしている。一方ではぼくは、ずっとパリにいながら、架空の東京での生活を回想しているのであり、他方ではずっと東京にいながら、想像上のパリのアパルトマンでの生活を眺めている、そのような二重の自分を振りかえりながら、ぼくは問いかけているのである。いったいどちらの自分が、ほんとうの自分なのか、と……。ぼくはいったいどこにいるのか、と……。

気がつくと、いつの間にか日が暮れて、窓の外は真暗である。六時だ。今夜は、何を食べようかと考える。昼にステーキ用に買って来た肉が、まだ半分以上残っていて、ヴィアンドックスに漬けてあるので、すきやきでもしようか。そう思って、買物籠を下げ、葱を買いに出かけるが、途中で気が変わって、新聞（『ル・モンド』）と『エクスプレス』（週刊誌）だけ買って帰って来る。はるさめと葱を入れても、豆腐がなければ、うまいすきや

きが出来そうもないからだ。それに、一人分のすきやきを作るということは、案外むずかしいような気がしてきた。それで、インスタント・ラーメンをスープに見立て、そのあとで肉を焼き、最後にキャマンベール（チーズ）とみかん一個で夕食をすます。酒はボージョレ。

そして再び、机に向かったわけだが、そうして炊事をしたり、物を食べたりしている間は、自分がフランスにいることを疑うことはなかった。東京の自宅にいれば、家の者が呼びに来るまで待っていれば、ひとりでに夕食が出来上がっているのであるから、その違いがはっきりし過ぎている。食後に、ラジオのニュースを聞きながら、のんびり煙草をふかしていても、皿を洗わねばならないこと、ごみを一階のプーベル（ごみ桶）まで捨てに行かねばならないこと、風呂に入らねばならないこと、などを考えると、自分が今いる国ないし土地について、錯覚を起こす余地は全くない。

ところが、再び机に向かって、そうしたことを書きとめていると、またしても、自分が別のところにいるという錯覚、というよりは、必ずしも今いるところにいるわけではないという感覚、どこと定まらないがどこか別の不特定のところにいるような感覚におそわれだす。つまり、身体とは無関係に頭だけが働き出すと同時に、現実の現実性が怪しくなるのであり、夢が現実の中に浸透して来るのである。だから、常に身体を動かしている活動家は、決して夢想家ではなく、現実主義者である。そのような人間にとっては、夢想家は現実を見失った病人にすぎない。たしかに社会的尺度から見れば病人かも知れないが、し

かしその病人の見る夢幻的現実が、活動家の見る外的現実以上に、実はもっと根本的な現実でないとは、誰に断言できよう。

これを書いている間にも、すでにぼくは、皿を洗い、ごみを捨てに行って来たのであり、間もなく風呂に入るはずであるが、そんなことを断わらずに、そ知らぬ顔で、明日また続きを書きついでゆけば、読者はそんなこととは露知らず、一息に書かれた文章として読むに違いないのである。ぼく自身もまた、一月たって読み返せば、これを書きつつあるぼく自身の行動や心境以上に、文字によって表わされた行動や心境だけを、よりいっそう現実的なものと受けとめることだろう。小説が読者を引きずって行く根拠もそこにある。

そう書いている間にも、ぼくはまた一つ、蜜柑を剝いて食べ、それを食べながら、そもそもぼくは、こんなことを書くために、わざわざ高い金を出して、パリくんだりまで来て、一人のくせに二間のアパルトマンなど借りたのだろうか、と考えたのだった。その問いに対して、ぼくの心の中には、肯定的な答えと否定的な答えと、双方が聞こえて来るのだが、そのことについては、いずれもっと真剣に考え直してみる必要があるだろう。とにかく、フランスへ来たことも、このアパルトマンを借りたことも、この文章を書くことも、たとえそのきっかけがフランス政府の招待だったとしても、いずれもぼく自身選んだ行動であることは確かである。だから、まず最初に、このアパルトマンがどんなアパルトマンであるかを、多少詳しく書きとめておくべきかも知れない。

場所はパリのモンマルトルの一角、有名な「ムーラン・ルージュ」を左に見て丘の方へ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c